

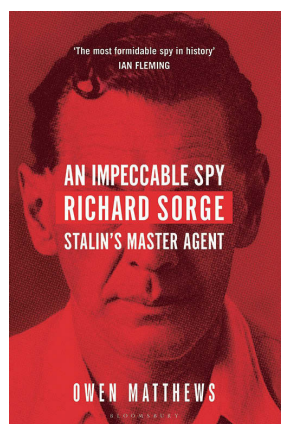
オーエン・マッシュューズ

『非の打ち所のないスパイ』

——リハルト・ゾルゲ、スターリンの熟練工作員』

Owen Matthews, *An Impeccable Spy: Richard Sorge, Stalin's Master Agent*

瀧澤 一郎



Bloomsbury Publishing, 2019

ゾルゲ本の分類

ゾルゲは、その知名度、評伝等の関連書籍発行点数・部数等で、古今東西のスパイ群像の中で、一頭地を抜いた存在である。この知名度や「人気」を人為的に維持するため、またその「人気」に寄りかかった市場価値があるために、いわゆるゾルゲ本は今でも連綿と刊行されつづけている。こうしておおむね一九六四年以来、無慮数千（万？）点と言われる、宣伝頒布用小冊子のようなものから数巻からなる大部なセット本まで、大小様々なゾルゲ本がロシアをはじめ世界中で刊行された。

これらは大別して、二つのグループに分類されよう。第一が、ゾルゲを、世界最優秀、近世で最も偉大なスパイなどと持ち上げる、ゾルゲ礼賛本だ。全体の九〇パーセント以上を占めるであろう。

う。

第二は、ゾルゲを特に、偉大とも凡庸とも評点を与えず、彼の諜報報告を客観的に分析し、それが果たして、スターリン以下のソ連指導部の外交軍事戦略上の利益になったか、ならなかったかを冷静に判断する、アクセス可能なかぎりの一次資料に依拠した書籍もしくは論文である。礼賛本と違って、売れないし、発行部数も少ない。少数ながら、中間派とも言うべきか、第三グループも存在する。

さて、ここで取り上げたマッシュューズの『非の打ち所のない（欠点のない）スパイ』は、その表題のみならず内容からみても、礼賛本に属するものと言わざるを得ないであろう。この「非の打ち所のない」という言葉は、「彼の仕事は非の打ち所がなかった」と

した、ソ連亡命後に党専従の宣伝要員と化した元英諜報部高官キム・フィルビーの引用であるが、著者自身のゾルゲへの傾倒ぶりも、並大抵なものではなく、本書の結語とも言うべき最後の十三行にいつそう明らかである。

ソ連邦は公式にゾルゲを偉人として列聖の堂宇に祀った。しかし、ソ連にはゾルゲの銅像やゾルゲ本は多々あるが、自身の最も偉大なスパイに対する疑惑、無関心、究極の裏切りが実在したことをよく払拭しうるものではなかった。彼ほど巧みに、長期にわたりモスクワに仕えたソ連工作員はいなかった。ゾルゲの手になるスパイ網は、日独両国の権力中枢へのアクセスという点で近代諜報史に唯一無二であった。だが、彼が選んだ国家が最大の危機に瀕したとき、スターリンが醸成したバラノイア状況の下では、彼がせつせとモスクワへ発電した黄金情報は無視される定めであった。ゾルゲは人間としては短所もあつたが、非の打ち所のないスパイ、また、勇敢で、頭脳明晰、不退転のスパイであつた。彼の上司たちが、彼が身命を捧げた国家の命運を左右する利害より自らの出世を優先するワイロ好きの小者であつたことは、彼の悲劇であつた。(傍点筆者)

著者のゾルゲへの痘痕^{あばた}も醫^いの岡惚れ^{さくほ}ぶりが露わな文章だ。「彼ほど巧みに、長期にわたりモスクワに仕えたソ連工作員はいなかった」とか「権力中枢へのアクセス」では「唯一無二」というのは言い過ぎだろう。^②

ゾルゲの「南進」情報がソ連を救った？

著作の冒頭は、著者が読者を引き込むために、腕に縊^よりをかけるところである。マッシュューズは、ここにあまねく知られたゾルゲ神話の一つである「ゾルゲの日本南進情報により、極東師団の西送が可能になり苦戦中のソ連軍が救われた」というストーリーを鼻息荒げて意気込むように張り出す。これが有名な俗説であり、多くの専門家から、否定されていることを知った上での幕開けの一章であつたのだろうか。

ゾルゲが、日本の対ソ進攻はない(南進)とモスクワに報告し、英明なるスターリンが極東から二六個正規師団を引き抜きモスクワ近郊に配した。この援軍が間にあい、首都攻防の帰趨が決まつた、という話がある。この「南進決定」情報も、実際は、それほど明確なものではなく、まだ、日本の北進(対ソ進攻)の意図が完全に消えたわけではない、とゾルゲ本人が留保を付けている。^③

一九四一年に極東から欧州地区へ、戦前編成の九狙撃師団、一機械化狙撃師団、一戦車師団が移送されたことは事実だ。各部隊

の配備先は、それらの部隊の師団史を見れば容易に確認できる。

ところで、ゾルゲ報告であるが、日本が九月六日に御前会議で採択した決定について彼が通報したのは、やつと九月十四日のことである。極東からの部隊移送は、九月初旬から始まった。たとえば、第三師団は九月十一日、第二六師団はおおむね九月一日に移送を開始した。これも各師団史に書いてある。つまり、ゾルゲ報告とこれらの師団の移転とは何の関係もなかったのだ。

先人の著作に酷似

この労作にかけた著者の努力を否定するわけではないが、本書とその二十一年前に書かれたロバート・ワイマント著 *Sabini's Spy: Richard Sorge and the Tokyo Espionage Ring* (邦訳書タイトル『ゾルゲ――

引裂かれたスパイ』)を比較してみると、すぐ気付くのは、両書の章立ての酷似である。両書の第1章に当たる部分は、ともに「ゾルゲの生い立ち」、第2章は「革命活動からコミンテルン」、第3章は「コミンテルン専従時代」、第4章は「上海」、第5章は「日本へ」、第7章は「東京スパイ網立ち上げ」、8と9章は「モスクワ帰還」、10と10章は「花子との出会い」、11と10章は「オトとの親交」、という具合に両書の各章とそこで扱われるテーマが同じだ。5と6章などは、扱っている内容のみか、書き出しまで酷似している。

実は、両本ともに、F. W. Deakin and G. R. Story, *The Case of Richard Sorge*. London: Chatto & Windus, 1966 (邦訳『ゾルゲ追跡』一九六七)を下敷きになっているからだ。

両本を突き合わせて比較することは本論の目的ではないが、ざっと見てもこれほど類似点が目立つ。本の構成、内容においてこれほどワイマントに負っていないながら、マシューズはプランゲの著作は「グレイト」と評しながら、ワイマントのものは、ゾルゲについての「最新の英語本」という紹介だ。^⑤ ワイマントは日本に没入し、日本語をかなり使いこなした。マシューズの日本語力は、本書に散見される奇妙な日本語からもわかるように、それほど自家薬籠中のものとは思えない。

註

(1) ゾルゲ本の嚆矢である『愛情はふる星のごとく』は、一九四八年に刊行されベストセラーになった。ソ連は、日本など海外におけるゾルゲ人気を勘案し、一九六四年に忘れ去られていた非合法工作員ゾルゲをソ連邦英雄として国家宣伝に利用することに決定した。

(2) 卑近な例として、上記のキム・フィルビーはどうであろうか。彼はリクルートされてから「母国」ソ連に逃亡するまで三十年間ソ連工作員であった。逃亡時はM I 6における対ソ防諜の最高責任者、次期長官の有力候補でさえあった。彼を首魁とするスパイ網「ケンブリッジ五人組(六人組説あり)」は英王室内にまで浸透していた。その活動の全貌は未だ解明されていない。世界に冠たるスパイ王国ロシアである。永久封

印扱いの元工作員が、帰還・未帰還を含めてどれほどいるか、見当も付かない。ゾルゲは、ロシア当局と西側スパイ小説業界が熱心に持ち上げるほどの、「天才スパイ」でも、「近世最大のスパイ」でもなかったことは、今ではロシア内外の多くの専門家の一致するところである。

- (3) Асено Рихарда Зорге, неизвестные документы, Публикации, вступление и комментарии А.Г.Фесюна, Москва, 2000. С. 131, 132. (フエンユン編『ゾルゲ関連未公開資料集』一三二頁、一三三頁)

- (4) В памятни и славе (очерки истории Краснознамённого Сибирского военного округа) / [ком. авторов], изд. 2-е, испр. и доп. — Новосибирск, 1988. — С. 106—110. Крылов Н. И., Алексеев Н. И., Араган И. Г. Навстречу победе. Военный путь 5-й армии. Октябрь, 1941—август 1945. Москва, 1970 等を参照。

- (5) 本書、四一七頁